

# ハレバレモンスターSTORY

## 第1章

### 第5話 一步

陽が傾き5つの影が長く伸びる。

『なんかやりきった一って感じ』

「思った以上に終わったくない？」

「僕の負担が大きかった気がするんだけど、特にハルネさん」

「感謝してるって～」

『擬音語ばっかでハルネらしかったよね』

3人の背中を見ながら、不思議な充実感が胸に溢れている。

なんの気負いも気遣いも必要なく、ただついて歩いている自分。

「今日はありがとう、ヒタチくんのおかげでものすごく捗った」

「そんなことはないよ、俺も・・・楽しかったし」

「ヒタチくんの絵、私もいいなって思った。」

「えっ？」

「それに、下手じゃないか気にしてたんだって」

「いや、それはまあ」

「いつも自信あって、何でも出来るから、少し意外」

「そんな風に見えてたんなら、頑張ってた甲斐があるかな」

「・・・そっか、・・・なんだか似てる。私は誰かに嫌われるのが怖い、仲間外れにされるのが怖い、だからみんなに合わせようって。

あっごめんなさい、似てるなんて勝手に。」

「ううん、なんかわかる。きっと俺もそうだから」

「・・・でもねリィちゃんといると、自分の気持ちを口にしてもいいのかもって」

そうか今日、俺が感じていた居心地の良さってそういうことなのかもしれない。

『ホーミーン！ヒタチくーん！はやくー』

前を歩いていた3人と気付けば距離が空いていた。

俺たちを呼ぶその表情は逆光の中でも笑っているのがわかる。

「行こっ」

隣にいたホミさんが先に駆け出す。つられて俺も走り出した。

『さあ！それでは夏休みの宿題、ほぼほぼ終了を祝して！』

『「「「「いただきまーす」」」」』

「大切な時間だね」

『そっ！今日食べなかったら、一生後悔するよきっと』

「めっちゃ美味いんだけど〜」

「・・・沁みる」

「.....」

『どしたの？おいしくない？』

「ううん。めちゃくちゃ美味しい」

部活帰りに何度も食べているはずなのに、これまでのどのコロッケよりもそう感じる。

パシャッ

「泣くほど美味そうにしてたから記念に」

「泣いてねえし！それよりテツ、今すぐ消せえ」

「残念、もうクラウドにアップ済み」

「テツくん、それみんなの共有フォルダに入れよ〜よ〜」

「了解」

「了解じゃねえ！」

バカみたいに走り回って、バカみたいに大声を出したのはいつぶりだろう。

怒ってたはずなのにいつのまに笑ってたんだろう。

今日一日で自分の中のいろんなものが変わった気がする。

『それじゃみんな！この夏、最高の思い出一緒につくらない？』